



イギリスのエスニシティ問題 : C・ピーチにおけるセグリゲーション論 (特集 現代イギリスに<日本>を読む)

檜原, 聡子

(Citation)

社会学雑誌, 16:47-61

(Issue Date)

1999-03-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010931>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010931>



イギリスのエスニシティ問題

——C・ピーチにおけるセグリゲーション論——

榎 原 聡 子

神戸大学大学院文化学研究科博士課程

はじめに

他の国々よりも一足早く産業革命を経験し、広大な植民地を領有したイギリスは、世界各地に多くの移民を送り出してきた一方で、大量の移民もまた受け入れてきた。戦前にはアイルランド人やユダヤ人の大量移住を、戦後には東欧からの難民や西欧からの経済的移民を受け入れてきたことは、その移民受け入れの歴史において、留意しておかねばならない（富岡一九八八）。しかしながら、今日のイギリスのエスニシティ状況という点においては、戦後に始まり、一九六〇年代始めにピークを迎えた旧植民地（インド亜大陸、カリブ海地域、あるいはアフリカ）からの人々の移動は特に注目に値する。

これらの旧植民地出身者とその子孫の人口は、一九五一年には合計で八万人にも満たなかったのが、一九六一年ま

でに五〇万人（総人口の約一％）、一九七一年までに一五〇万人（三％）、一九八一年までに二二〇万人（四・一％）、一九九一年までに三〇〇万人（五・五％）に達している。つまり、旧植民地に出自を持つ人々の人口は、総人口比はそれほど高いという訳ではないが、人口の増加スピードには著しいものがあつた（表1）。そして、その多くは、入国後、住宅事情の芳しくない大都市中心部、とくにインナーシティに集中した。一九五〇年代後半からのこのような旧植民地からの移民の急増とその大都市中心部への集中、そしてそれに刺激された形で本国人による彼らに対する暴力事件の多発、さらにはイギリスの景気の後退という事態に直面したイギリス政府は、「英連邦移民法」（一九六二年七月一日施行）を制定し、旧植民地からの移住を制限しようと試みた。これ以来、旧植民地出身移民の存在は一般に「人種問題」として認識されるようになった。イギリス政府は彼らとイギリス本国人の間の関係を「人種

表1 イギリスにおけるカリブ系、インド系、バングラディッシュ系の推定人口規模の変遷

年	西インド系/カリブ系	インド系	パキスタン系	バングラディッシュ系
1951	28,000	31,000	10,000	2,000
1961	210,000	81,000	25,000	6,000
1966	402,000	223,000	64,000	11,000
1971	548,000	375,000	119,000	22,000
1981	545,000	676,000	296,000	65,000
1991	500,000	840,000	477,000	163,000

出典 Peach 1996a

表2 グレーター・ロンドンにおけるカリブ生まれのIDの比較・変遷

年	バラレーベルのID	ワードレベルのID	e.dレベルのID
1961	入手不可能	56	
1971	38	49	65
1981	37	46	53
1991	34	41	50

出典 Peach and Rossiter 1996

関係」と規定し、自治体への助成金、インナーシティ政策への助成、反差別法としての人種関係法の制定という形で、「良好な人種関係」をめざす政策を実施してきた（富岡一九八八）。

以上のような国家的な「人種関係」への注目と政策の実施を背景に、イギリスにおいても都市エスニシティへの学問的な関心は高まりを見せることになる。都市エスニシティに関心を寄せた研究者の多くは、まず移民国アメリカの先行研究に学び、また異なる学問分野の研究者との意見交換を積極的に行なった。本稿はそのような研究者の一人として、社会地理学ないしは人文地理学の立場から産業化する都市環境におけるエスニック・グループの問題を取り扱ってきた、オックスフォード大学のC・ピーチ教授の研究成果を追うことを通じて、イギリスにおけるエスニシティ問題を紹介したい。

一 一貫した問題意識

ピーチ教授は、シカゴ学派都市社会学のR・E・パークが創始した人間生態学と長年にわたって人種関係を研究してきたM・ゴードンの多元主義論をその研究の基礎に位置づけた上で、イギリスの都市エスニシティについて経験的な調査を積極的に進めてきた。本節では、ピーチ教授の持

つこれらの一貫した問題意識をそれぞれ示すこととする。

(一) 人間生態学の影響

人間生態学は、人間と制度の空間的・時間的な分布の過程ないし構造を体系として捉える社会学の一部門である。つまり、競争、闘争、適応、同化などの社会的相互作用のプロセスを、人間や制度の空間的分布の過程ないし構造と関連付けて理解しようとする試みであると言える。ピーチ教授はこの人間生態学の観点をさらにおしすすめ、空間的な分布は単に社会的相互作用のプロセスの結果であるだけでなく、逆により動的な影響をそのプロセスに与えるものと認識する (Peach and Smith 1981)。そして、空間的に相互にセグリゲートされた集団間には社会的な相互作用はほとんど生まれないであろうと論を進め、その視点からケネディが提示した「トリプル・メルティング・ポット」仮説を疑問視する (Peach 1981)。

「トリプル・メルティング・ポット」仮説とは、人種・民族・エスニック集団間の同化の壁は取り払われているがプロテスタント (英国系アメリカ人、ドイツ、スカンジナビア諸国出身者)、カトリック (アイルランド、イタリア、ポーランド出身者)、ユダヤ教 (世界各地からのユダヤ人) の宗教グループごとに婚姻関係が深まり、新しい集団関係が構成されつつあるという議論である。これは、同

化主義である「人種のるつば」仮説の妥当性に異議を唱える役割を果たし、今日広く受け入れられている多元主義的な観点の基礎となっているとも言える (関根一九九四)。

ピーチ教授が異議をはさむのは、カトリック系グループ内の婚姻関係の深まりについてである。それは、「空間的に相互にセグリゲートされた集団間に社会的相互作用は生まれない」という彼の主張をあとづける、ダンカンとリバーソンがアメリカの諸都市における調査を通じて提示したふたつの知見と矛盾しているからである。その知見とは、第一に異なる民族的な出自を持つグループ (特に新移民) は空間的なセグリゲーションを示すということ、第二に空間的なセグリゲーションと婚姻関係の深さは逆関数的に比例するというものである。つまり、ダンカンとリバーソンの調査では、同じカトリック系グループであるイタリア系、ポーランド系、アイルランド系の各グループ間には比較的高い空間的セグリゲーションが見られること、そしてケネディの主張とは異なり、これらのグループ間には、同じカトリック系であっても婚姻関係の深まりはとくに見られないことが示されたのである。

「トリプル・メルティング・ポット」仮説との間の矛盾を解決するために、ピーチ教授はケネディが用いたデータそれ自体に戻って再検証し、カトリック系グループ相互の婚姻率が、ケネディが示すほどには高くないということを

明らかにした。このようにして彼は空間的な分布と社会的な相互作用の程度の関係性についての自らの主張を確証するだけでなく、さらにデータの分析を進めて、エスニック・グループ間の空間的なセグリゲーションの程度からそのグループ間の婚姻率は予測可能であるということまで証明してみせた (Peach 1981)。

(1) M・ゴードンの多元主義論の影響

ピーチ教授の研究を第二に基礎づけるのはM・ゴードンの多元主義 (pluralism) 論である。社会地理学には多元主義について、このゴードン・モデルとM・G・スミスによるモデルの2つの基本的なアプローチが存在する。端的に言えば、スミス・モデルは、空間的なセグリゲーションの原因について、ある集団によるもうひとつの集団への強制や支配という要素を強調するものであり、それを確立する典型的な政治制度は植民地主義に関連する支配政治であるとする。他方、ゴードンのモデルは必ずしもある集団間に大規模な強制と支配に基づく社会的相互作用がなくとも、空間的なセグリゲーションは存在しうるとみなすものである (Ley, Peach and Clarke 1984)。

ピーチ教授は、スミス・モデルが示すように、強制と支配が確かに多元主義社会を形作る要素であり、それを生み出した植民地的な支配がなくなっても集団間の支配

は存続するということを認めながらも、多元主義は強制とは関係なく存在しうるものであるとする。つまり、多元主義にとって、支配は十分条件ではあるけれども、必要条件ではないと考えるのである。このようにゴードンの多元主義モデルを基礎に置いた結果、ピーチ教授は多元主義について、同一であるとみなされているその集団内部にも分化が生まれうること、そしてその多元性や分化には自発的な側面が含まれることに注目するのである (Peach 1984)。

二 西インド諸島出身者のセグリゲーションとアイデンティティ

前節で述べたように、エスニック集団の空間的分布と社会的相互作用の関連性を重視し、自発性の側面を強調する多元主義モデルの立場を採用した上で、ピーチ教授は実際にイギリスにおける西インド諸島出身者のセグリゲーションとアイデンティティについて、調査・分析を行なっている。本節ではこの西インド諸島出身者のセグリゲーションとアイデンティティについての彼の研究の成果を紹介したい (Peach 1984)。

(一) 西インド諸島出身者に課せられた同質性

西インド諸島出身者は通常一括されて論じられることが

多い。しかし、西インド諸島自体には機能上のまとまりは歴史的にはほとんど存在してこなかったとピーチ教授は指摘する。旧植民地時代から、西インド諸島の経済は島相互ではなく、イギリス本国の支配力によって統合されているにすぎなかった。このような平行する経済に加えて、各島々のアイランド・アイデンティティの強さが、西インド諸島における政治的もしくは経済的統合を促進することを困難にしてきた。

しかし、イギリス政府は、帝国末期において、西インド諸島をひとつの同質的な社会のセットであるとみなし、一括した戦後処理の対象として扱うとともに、また、「人種関係」施策を行なう際に、イギリスに移住してきた西インド諸島出身者を同質的な集団であるとみなした。このように西インド諸島出身者を同質的な集団として扱う視点は、マルクス主義者と人種主義者という政治的な立場では全く正反対にある人々によって、それぞれさらにおしすすめられた。マルクス主義者は機能的な階級のもとを促進させるために、そして実際にそれらのグループに共通する諸問題の対処に協力し合うために、西インド諸島出身者、インド亜大陸出身者、そしてアフリカ大陸出身者たちのあいだに「黒人」としての連帯を促そうと試みた。他方、人種主義者たちは、エスニックな差異をほとんど考慮することなく、すべてのインド亜大陸出身者を「パキス」と呼び、すべて

の西インド諸島出身者を「ジャマイカン」と呼び、さらにはすべての旧植民地出身者を「黒人」と呼んで、彼らを嫌悪の対象として一括して扱おうとした。

確かに旧植民地出身者のイギリス社会における役割が類似していることは事実であった。イギリスの戦後経済の拡大にとって、彼らはいずれも労働力予備軍として、重要な役割を果たしてきたからである。実際、旧植民地出身者のイギリスへの移動の波は、それぞれにややタイムラグがあるものの、イギリス経済のサイクルに対応していた。そして、彼らは本国人労働者が就きたがらない仕事に導入されるが、それらの仕事は人口上衰退を示していた大都市中心部に集中していたために、旧植民地出身者は職業上だけではなく地理的にも類似した境遇に置かれることとなった。その結果、彼ら旧植民地出身者を同質的なものとして捉える見方が、一層強められることになったのである。

(二) 強制としての多元主義

旧植民地出身者は一方で以上のようなマクロスケールでの類似性を示しているが、他方、各集団は社会的な独自性を維持しており、その定住パターンも空間的に分化していた。西インド諸島出身者とインド亜大陸出身者は、同じ地域に暮らすことを避ける傾向にあった。一足早く大量の規模でロンドンに到着した西インド諸島出身者はインナーバラに

顕著な形で定着しているが、インド亜大陸出身者はインナーバラよりもむしろアウターバラに分布している。西インド諸島出身者の集中は列車ターミナルと関連しているのに対し、インド亜大陸出身者の集中は空港や港と関連している。

しかし、これらは一見空間的な分化を示しているけれども、いずれの地域も入国の場としても、働く場としても重要であるという共通性に加えて、イギリス本国人が住むことを避ける地域でもあるという共通性を持っていた。つまり、彼らは同じ地域には居住してはいないけれども、同じ種類の地域に暮らしてきたのである。このことは、彼らの空間分布がスミスの多元主義モデルが示すような強制や支配の結果としての側面を持つことを示していると分析できらる。つまり、旧植民地出身者は職業構造の最末端に位置づけられているために、ミドルクラスの住宅市場でのその競争力が著しく制限され、また当該自治体への在住期間がその応募規定に定められている場合が多かったので、新来者としての彼らの地位はしばしば公営住宅へのアクセスを妨げることとなり、必然的にそのような類似した地域に居住する結果となったのである。また、本国人の人種差別的な態度も、すべての労働者階級の住宅が彼らに開かれないひとつの要因となっていたことにも留意しておかねばならない（富岡一九九二）。その多元化の一端は、一九六一年から一九六六年の間に西インド諸島出身者が白人人口から分離す

る程度が次第に増大する傾向を示したことに表れている。⁽¹⁾

（三）選択としての多元主義

西インド諸島出身者はあたかも同質的な集団であるかのように扱われることが多かったが、それぞれがもつアイランド・アイデンティティは依然強いままであった。イギリスのセンサスは、西インド諸島内のすべての島や領域的集団について区別を行なっているわけではないため、それらの空間的な分布を正確に把握することは困難である。しかしながら、西インド諸島出身者についての具体的な調査を見ると、チェイン・マイグレーション（連鎖移民）の過程が、各島ないしは各村落集団のイギリスにおける特定地域への集住を生み出していることは明らかである。チェイン・マイグレーションは、イギリスに到着したばかりの人々が同じ島出身者を通じて居住地や職を見つけるのに役立っただけでなく、その後も居住の近接性と同じ島出身者の間の結婚を通して、その絆は継続・強化された。

一九七一年センサスによれば、グレータールンドンのバラレベルでのジャマイカ出身者の空間的な分布を見ると、それは全体としての西インド諸島出身者の分布とほぼ一致している。これはジャマイカ出身者が西インド諸島出身者の過半数を構成しているからである。しかし、一定の統計的な操作を行なえば、センサスが区別化しているアイランド・

グループに限られてはいるが、それらがそれぞれの集住のパターンをもつことが明らかに示される。また、ID (Index of Dissimilarity) という統計的指標を用いてセグリゲーションの程度を見ると、全体としての西インド諸島出身者と本国人の間の値と、同じ西インド諸島出身者として扱われるジャマイカ出身者とトリニダト出身者の間の値は、わずかに前者が上回っているにすぎず、これは西インド諸島出身者の空間的な多元性の一端を示すものと言える。

つまり、西インド諸島出身者が集住しているというよりも、むしろ各アイランド出身者が集住しているといった方が正確であり、同一のグループとみなされた西インド諸島出身者の間にも分化が存在しているのである。さらに、これらの空間的な分化が、スミスの多元主義モデルが示すような強制に基づくものではなく、彼らのアイランド・アイデンティティの強さにしたがって、選択されたものであるということを経教授は指摘する。

(四) アイデンティティと言語

ピーチ教授は以上のように空間とアイデンティティの関係について指摘するだけでなく、さらには言語とアイデンティティの関係についても言及している。第一項及び第二項に示されたように、西インド諸島出身者のアイデンティ

ティ及びその空間的な分布は決して同質的ではないにもかかわらず、イギリスにおける若い「黒人」の話す仲間言葉が収斂化しつつあることに注目する。

収斂化を示しつつあるその言葉はどの西インド諸島の言葉でもないが、多くのジャマイカの要素とロンドンなまりの要素を含んでいる。確かにジャマイカ出身者は西インド諸島出身者の過半数を構成しているために、彼らの言葉が支配的なスタイルになる傾向は否定できない。しかし、このことが若い「黒人」の間で空間および状況と無関係に常にジャマイカ系クレオールが使われるということの意味する訳ではない。言語の使用はある空間において単独のアイランド・グループがどの程度支配的であるのかということとや、誰が誰に対して何を話しているのかということと密接に関連しているのである。また、階級、ライフスタイル、ライフステージ、さらには白人社会からの分離の程度もクレオールの使用の程度を左右していると言える。つまり、言語もエスニシティそれ自体と同様に、きわめて状況に依存的な性格を有しているのである。

とは言え、若い「黒人」のあいだで使われる仲間言葉が収斂化を示しつつあるという事実は存在する。これは、多くの第二世代にとって、「黒人イギリス人」というアイデンティティが存在していることを反映しているとピーチ教授は考える。自らの出自である島社会への関心やそれらに

関わるアイデンティティは第二世代にとって重要ではなくなり、たとえばレゲエのようなわかりやすいジャマイカの要素が彼らの新しいシンボルとして優勢になりつつあるのだ。

こうして、皮肉にも、すべての西インド諸島出身者をジャマイカ出身者であるかのように扱った初期のイギリスの鈍感な態度が、ここへ来て正しいものとなりつつあり、しかもそれがマルクス主義者の言うところの階級意識からではなく、むしろ白人のレイシズムとの関連で生まれていることをピーチ教授は重視する。そして、そのようにして生まれた、もともとセグリゲートされた地区の「黒人」の若者は独特のストリートライフスタイル（服装、言語、音楽、宗教、マリファナへの態度）をもつにいたり、それらが警察との反目を促す結果を生んでいるのだと結論づけている。

三 ミクロレベルからセンサスレベルへ

西インド諸島出身者のロンドンにおける空間分布と社会的相互作用についてのピーチ教授による以上のような分析は、一九九一年イギリスセンサスへのエスニック・アイデンティティそれぞれ自体を問う設問（エスニック・クエスチョン）の導入にともなう、さらなる展開を示した（Peach 1996a）。

（一）エスニック・クエスチョンのセンサスへの導入

エスニック・グループの数とそれらが示す特徴への関心は人種関係法の発効とともに高まりを示したが、一九九一年までイギリスのセンサスにおいてエスニック・アイデンティティそのものを尋ねる問いは設けられることはなかった。なぜなら、それはある特定のグループを「人種的に」カテゴライズすることにつながりうるという強い懸念が存在したからである。⁽²⁾したがって、一九九一年以前のセンサスでは迂回した形でエスニックなデータの収集が行なわれた。すなわち、一九六一年センサス以来、出生地を尋ねる設問がエスニック・クエスチョンの代用物として用いられてきたのである。

しかしながら、出生国とエスニシティを同一視することにはいくつかの問題がある。第一に旧植民地諸国で生まれた人々のなかには多くの白人人口が含まれており、出生国データに基づいてエスニックな推計をおこなうと、非白人エスニック人口は実際よりも高い値を示すことになる。⁽³⁾また、これに加えて、移民の波がピークに達した一九六〇年代以降、次第に第二世代の占める割合が増大するにつれて、⁽⁴⁾出生国によるエスニックな推計は次第に現実からの乖離を深めることになった。つまり、年々その構成割合を高めている第二世代のほとんどはイギリス生まれであるために、出生国によるエスニックな推計では彼らの存在は無視され、エス

ニック人口は実際よりかなり低い数字しか示さないことになるのである。

このような、とくに後者の問題が顕在化にしたがって、センサスへのエスニック・クエスションの導入が現実味を持って議論されることになった。エスニック・クエスションへの拒否反応は上記のように存在したが、そこで新たに浮上してきた問題はエスニシティのカテゴリ分けに関わるものである。これは出生地が明白なカテゴリであるのに対し、エスニシティは状況的なものであるために生じた問題である。一九九一年センサスでは十のカテゴリ（白人、カリブ系黒人、アフリカ系黒人、その他の黒人、インド系、パキスタン系、バングラディシュ系、中国系、その他のアジア系、その他のその他）が作成されたが、それぞれのカテゴリの妥当性をめぐる問題が常に存在することは想像に難くないだろう。

また、それに関連する形で、カテゴリ分けの基準がエスニックに関わるものと「人種」に関わるものとが混同されているという問題も存在している。とくにヨーロッパ系の人々を白人として一括してしまうことについては、イギリス国内におけるネーションによるアイデンティティの分裂やアイルランド系の存在を無視したものであるという指摘もなされている⁵⁾。さらには、今後いつそうの増加を示すと考えられる、異なるエスニック・グループ間の婚姻によ

って生まれた子どもたちを、どのようにカテゴライズするのかという問題も残されている。

以上のような問題点を持ちながらも、イギリスのセンサスにおけるエスニック・クエスションが、比較的近年移住してきた非ヨーロッパ系グループとその子どもたちの状況を統計的に明らかにしたという点で、それは画期的なものであったと言える。さらには、センサスの質の向上という点について述べるならば、一九五一年に初めてアイルランドのみに適用されたエニユメレーション・ディストリクトレベル⁶⁾の資料公開が、七一年にはそのデータへのアクセス手段の問題はありながらもイギリス全土にも適用され、さらに八一年にはそれらが容易に入手できるようになったことは、エスニック・クエスションの導入と結びついて、エスニックな空間分布に関する分析を飛躍的に精緻なものとすることに寄与したと言える。

（二）センサスデータが明らかにしたセグリゲーションの状況

このようなセンサスデータの質の向上を背景に、ピーチ教授はイギリスにおけるセグリゲーションについて考察を進める（Peach and Rositer 1996）。ここで、セグリゲーションという概念には二つの種類のものが存在しており、どちらの見方に立つかによってセグリゲーションの事実認

定が変わってしまうことに注意しておく必要があるだろう。第一の視点はあるひとつのエスニックないしは「人種」グループが特定の居住地域の総人口において占める割合を指す場合に用いるものであり、第二の視点はあるエスニックないしは「人種」グループの構成員が特定の居住地域においてしか見出されない場合をさすものである。前者は「ゲットー」のイメージが、後者は「エスニック・ビレッジ」のイメージがそれぞれあてはまる。

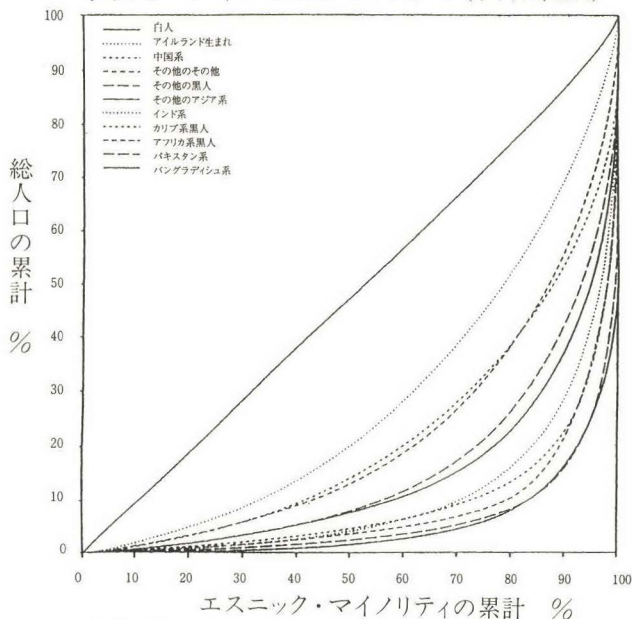
マクロなレベルで見ると、エスニック・マイノリティはかなり不均等な分布を示しており、スコットランドやウェールズよりもイングランドに、そしてそのなかでもとくにグレートロンドンとその他の主要な大都市圏カウンティに集中する傾向がある⁽⁸⁾。また、マイノリティはそのような主な都市地域内においても不均等な分布を示しており、インナーエリアに著しく集中する傾向も示している。そしてワードレベルやエニユメレーション・ディストリクト（以下E・Dと記す）レベルでは、多くのマイノリティ人口が白人人口の占める割合の低い地域に居住し、地域サイズが小さくなるにつれて、マイノリティ人口のプレゼンスが強まる傾向にある⁽⁹⁾。

しかし、個々のマイノリティが多数派を構成するようなタウンないしはシティも、さらにはバラも存在していない。また、高い集中を示すワードの数は少なく、そのような高

い集中を示す地域で暮らすエスニック・マイノリティも少ない（グラフ1）。それはアメリカ合衆国においてアフリカ系が示す高いセグレーションとは対照をなすものである。また、各マイノリティによって、集中の程度が異なっていることにも注意する必要があるだろう。イギリスでは、黒人グループよりも南アジア系グループの方がセグレーションの程度が概して高い。カリブ系黒人、アフリカ系黒人、その他の黒人がそれぞれもしくはあわせて構成する最大の集中がどのワードでも総人口の半分以下であるのに対し、南アジア系グループがそれぞれもしくはあわせて構成する最大の集中は、多くのワードで多数派となっている。

次に、セグレーションの二つの視点にそれぞれ対応する尺度を使用することによって、明らかにされる知見を示す。グループ間の空間分布の対称性に注目した、したがってゲッター的なセグレーションの程度を示すことになるID (Index of Dissimilarity) およびその変異体としてのIS (Index of Segregation) という尺度の使用による分析は以下のことを明らかにした。第一にセグレーションの程度がワードレベルよりもE・Dレベルの方が一般的に高く、それは特に中国系の場合に著しい。中国系のセグレーションの程度は、グレートロンドンでもマンチエスターでも、ワードレベルではもっとも低いものとなっているが、E・Dレベルでは非常に高いものとなっている。

グラフ1 ワードレベルのローレンツカーブ(イギリス、1991)



出典 Peach and Rossiter 1996

これは中国系の総人口がそもそも少ないということに由来している部分もあるが、同様に総人口数の少ないアフリカ系はワードレベルでもE・Dレベルでも同じ程度のセグリゲーションを示していることを考えあわせると、それらを中国系のセグリゲーションの特徴とみなすことは可能であろう。

第二はバングラディシュ系のセグリゲーションの程度が非常に高いという点である。このような分布は他のエスニック・マイノリティとは著しい対照をなしている。つまり、バングラディシュ系は白人からだけではなく、他のエスニック・マイノリティからも高いセグリゲーションの程度を示している。バングラディシュ系からのセグリゲーションの程度が最も低いパキスタン系との場合を注目すると、セグリゲーションの程度はワードレベルに比較して、E・Dレベルではかなり高い値を示していることがわかる。これらの特徴から指摘できるのは、バングラディシュ系のセグリゲーションには積極的を選び取られた側面が存在しているという点であろう。また、セグリゲーションの程度が二番目に高いパキスタン系も、ほとんどすべての他のエスニック・マイノリティからの高い程度のセグリゲーションを示しており、このセグリゲーションも選択としての側面を持つと考えられる。

第三にカリブ系黒人の場合、グレートロンドンにおけ

るセグリゲーションの値は、一九六一年からのデータと比較すると、どのレベルにおいても一貫して徐々に減少する傾向を示している（表2）。それは地理的に見ると、最も密集した中心地域からの減少及びその集中地域の外延への増大という形で現れている。当初のセグリゲーションの程度も合衆国の場合ほど高くはなく、しかもこのようにその程度が年々下降気味であるという点を考えると、アメリカ合衆国との間にエスニック・グループ間の空間的な距離だけではなく、社会的な距離についても大きな相違が存在することが予想できる。

次に、あるグループが別のグループにさらされる程度を尺度化した、つまりエスニック・ビレッジ的なセグリゲーションの程度を示すことになるリバーソンのP^{*}インデックスを使用すると、次のようなエスニック・マイノリティのセグリゲーションの特徴が明らかとなる。バーミンガムのE・Dレベルでは、パキスタン系は白人よりもパキスタン系に出会う可能性の方が高い。これはバーミンガムにおいてはパキスタン系がE・Dレベルでの集中の程度がかなり高いことと、白人がパキスタン系を含むE・Dに暮らす可能性がかなり低いことに由来すると考えられる。他方、バーミンガムよりもロンドンへの高い集中を示すバングラデシュ系の場合、バーミンガムのE・Dレベルではバングラデシュ系よりもパキスタン系に会う可能性の方が高いの

に対し、ロンドンのE・Dレベルではその他のエスニック・マイノリティよりもバングラデシュ系に会う可能性の方が高い。ただし、バングラデシュ系の場合、どちらの都市でも白人に会う可能性が飛びぬけて最も高く、これは白人人口に比して、バングラデシュ系人口が圧倒的に少ないという事実によっていると考えられる。

（三）セグリゲーションの要因分析と現状認識

ピーチ教授は、このように示されたイギリスにおけるセグリゲーションの状況をまずその要因と関連付けて考察する。つまり、これらの結果から、イギリスのエスニック・マイノリティのセグリゲーションがその経済的に劣勢な地位やレイシズムなどの消極的な要因だけに還元されることを否定し、チェイン・マイグレーションの過程のように積極的な要因も関わっていると主張するのである。このような考え方が彼の一貫した問題意識に基づいていることは言うまでもないだろう。一九六〇年代から八〇年代初頭にかけて、空間的なセグリゲーションの要因について、それが選択によるものか強制によるものかという議論が起った。これを調停するものとして、構造化理論を使用して、白人社会の差別的な強制がマイノリティ・グループによって内面化され、表面的には選択の結果のように見えるセグリゲーションが生まれるのだという主張があらわれたが、ピー

チ教授はそれを一種の強制モデルであると否定する。

セグリゲーションが単に白人からの周辺化の結果ではなく、彼ら自身の選択の結果としての側面をもつことを、彼は以下の三点に基づいて主張する。第一に上記のセンサスの分析から明らかにされたように、白人マジョリティと各マイノリティの間だけではなく、様々なエスニック・マイノリティ間に高い程度のセグリゲーションが存在していること、第二に個別の先行研究によって明らかにされているように、通常同質のものとして扱われているグループ内にもセグリゲーションが存在していること、そして第三にエスニック人口と都市人口のそれぞれの階級的な分布を比較することを通じて明らかになる、経済的な要因がエスニックな人口分布にそれほど重要性を持たないことによってである。

ピーチ教授は、イギリスの一九九一年センサスの分析から、このような従来からの主張を展開させるとともに、次のようなセグリゲーションに関する現実認識を行なっている。都市セグリゲーションについてアフリカ系アメリカ人と同じモデルを、イギリスにおけるエスニック・マイノリティもたどるのではないかという強い懸念が存在してきたが、一九九一年のセンサスはより樂觀的な結果を指し示していると考えるのである。つまり、ゲットー的なセグリゲーションもエスニック・ビレッジ的なセグリゲーションも

著しく高い、アフリカ系アメリカ人的なモデルのセグリゲーションはイギリスには存在しておらず、それはとくにカリブ系黒人についてより強く言えることである。なぜなら、カリブ系黒人は、その劣勢な経済的な地位と実質上続く明らかな差別にもかかわらず、ロンドンにおけるセグリゲーションの傾向は徐々にではあるが明らかに衰えを見せているからである。

おわりに

ピーチ教授のこれまでの研究成果の紹介を通じて、イギリスにおける都市エスニシティの状況を示してきた。それは以下の点にまとめることができるだろう。イギリスにおいてエスニックなセグリゲーションは確かに存在している。しかしその形態と規模は各エスニック・グループによって異なっている。それらのセグリゲーションは強制というネガティブな要因みならず選択というポジティブな要因の結果でもあり、またこれらの要因間にはダイナミックな相互作用が含まれている。とは言うものの、イギリスにおけるこのようなセグリゲーションは、アメリカのアフリカ系が示す著しいセグリゲーションと比較すると、その規模において明らかに異なる様相を示しており、今後アメリカモデルとは異なる空間的な分布を示すことになるであろう。

註

このようなイギリスにおけるエスニック・セグリゲーシヨンに関する知見に加えて、センサスへのエスニック・クエスションの導入をめぐるイギリスで立ち現れた問題は、エスニシティ問題を分析する際の基礎資料がその国籍に依存し、国籍ではかりしれないエスニシティ状況の把握の必要性が次第に明らかになりつつある日本の状況にとって、非常に示唆を与えるものとなると考えられる。

ただし、本稿ではピーチ教授がこれらの上にさらなる展開を示した住宅問題については、まったく触れることが出来なかった。それは今後の課題としたい。

(1) しかしながら、一九六〇年代及び一九七〇年代はじめに公営住宅が旧植民地からの移民にしだいに開かれるようになるにつれて、西インド諸島出身者の白人人口からのIDは減少傾向を示した。とは言え、一九七一年センサスの結果と一九七七年の全国居住調査の結果から、バラレベルでの白人と西インド諸島出身者間の分離のインデックスが三七・七から四一・五へと増加している(富岡 一九九二)。

(2) 実際、一九八一年のセンサスでは、予備テスト段階においてはエスニック・クエスションが含まれていたにもかかわらず、上記のような理由から回答者の強い拒否にあい、本番においてその設問は破棄されるという経緯があった(Peach 1996a)。

(3) たとえば、通常非白人マイノリティを指すものとされている

「ニューコモンウェルス出身者」と「インド出身者」の場合、一九九一年センサスによって、前者はその二〇%、後者はその一五%が白人人口であることが明らかにされた(Peach 1996a)。

(4) 一九九一年センサスによると、カリブ系黒人の五四%、インド系の四三%、パキスタン系の五〇%、バングラデシュ系の三七%、そしてその他の黒人の八五%がイギリス生まれである(Peach 1996a)。

(5) ただし、出生地に関する設問は依然存在するので、アイルランド系については出生地から推計するという方法がとられている(Peach 1996a)。

(6) ロンドンの場合、各地域レベルは次のような関係にある。シティー(ロンドン市)、バラ(ロンドン特別区) ↓ ワード(区) ↓ エニメレーション・ディストリクト。グレートロンドンにはシティーと三二のバラから構成されている。そしてその各バラは二〇弱のワードから構成されており、ひとつのワードにはおよそ二五〇〇世帯が含まれている。エニメレーション・ディストリクトはワードよりもさらに下のレベルの地域区分であり、ひとつあたり平均一五〇世帯が含まれる。

(7) イギリス全体におけるエスニック・マイノリティの占める割合は五・五%であるが、それらは均一な地理的分布を示している訳ではない。各地域でのそれらの構成割合を見ると、イングランドでは六・二%、ウェールズでは一・五%、スコットランドでは一・三%という値を示しており、エスニック人口がイングランドに集中していることが分かる(Peach and Rossier

1996)。

- (8) 例えば、グレーターロンドン、グレーターマンチェスター、ウエストミッドランズ及びウエストヨークシャーの大都市圏カウンティに居住する割合は、総人口では四分の一を構成するにすぎないのに対し、アフリカ系黒人では八三%、バングラデシュ系では七五%、その他の黒人、インド系、パキスタン系ではそれぞれ約三分の一という構成値を示している (Peach and Rossiter 1996)。

- (6) もっとも激しい集中を示す地域であるロンドンのタワームレット (バラ) のスピタルフィールズ (ワード) においてバングラデシュ系が構成する割合は六一%であり、そのなかでもっともバングラデシュ系が支配的なE・Dではその構成割合は九〇%を超えていた (Peach and Rossiter 1996)。

参考文献

- Ley, D., Peach, C. and Clarke, C., 1984. "Introduction: Pluralism and human geography" in Ley, D., Peach, C. and Clarke, C. eds. *Geography & Ethnic Pluralism*: Allen and Unwin, London
- Peach, C. 1981. "Ethnic Segregation and Ethnic Inter-marriage: A Re-examination of Kenn edy's Triple Melting Pot in New Haven, 1900-1950" in Peach, C., Robinson, V. and Smith, S. eds. *Ethnic Segregation in Cities*: Croom Helm, London
- Peach, C., 1984. "The force of West Indian island identity in Britain" in Ley, D., Peach, C. and Clarke, C. eds. *Geography &*

Ethnic Pluralism: Allen and Unwin, London

Peach, C., 1996a. "Introduction" in Peach, C., eds. *Ethnicity in the 1991 Census Volume Two The ethnic minority populations of Great Britain*: HMSO, London

Peach, C., 1996b. "Black - Caribbeans: class, gender and geography" in Peach, C. eds. *Ethnicity in the 1991 Census Volume Two The ethnic minority populations of Great Britain*: HMSO, London

Peach, C. and Rossiter, D., 1996. "Level and nature of spatial concentration and segregation of minority ethnic populations in Great Britain, 1991" in Ratcliffe, P. eds. *Ethnicity in the 1991 Census Volume Three Social geography and ethnicity in Britain: geographical spread, spatial concentration and internal migration*: HMSO, London

Peach, C. and Smith, S., 1981. "Introduction" in Peach, C., Robinson, V. and Smith, S. eds. *Ethnic Segregation in Cities*: Croom Helm, London

関根政美「一九九四『エスニシティの政治社会学 民族紛争の制度化的ために』名古屋大学出版会

富岡次郎「一九八八『世界差別問題叢書 8 現代イギリスの移民労働者 イギリス資本主義と人種差別』明石書店

富岡次郎「一九九二『世界人権白書 4 イギリスにおける移民労働者の住宅問題』明石書店